

5 南国市 明見彦山1号墳

明見彦山1号墳は、南国市明見にある古墳時代後期～終末期の古墳です。古墳の墳丘はおそらく円墳で直径14mと考えられています。古墳の中央には横穴式石室があります。石室の大きさは全長8.96m・玄室（棺や副葬品を置く部屋）長5.64m・玄室幅2.16m・羨道（玄室に続く通路）長3.32m・羨道幅1.20mです。この規模は高知県では大型に属し、このことから土佐三大古墳に数えられていました。しかし、調査が行われたことがなかったので、これまでその内容が不明でした。そこで、2年計画で発掘調査を行って内容を明らかにし、高知県の古墳時代を描く資料にしようと考えました。調査は2011年2月22日～3月24日に実施しました。

調査は、玄室の奥からみて左半分を発掘しました。すべてを発掘するのは右側の壁が傾いていたので危ないと考えたからです。調査の結果、古墳は盗掘によって大きな被害を受けていることがわかりましたが、それでも重要な発見がいくつもありました。まず、石室は想像以上に土が流れ込んでいて、現状から約70cm下にほんらいの床面があることがわかりました。その結果、玄室の高さは2.8mあることが判明しました。この高さは、高知県最大の古墳である南国市小蓮古墳の石室に匹敵する高さです。明見彦山1号墳被葬者は、高知平野においてかなり有力な人物であったことがこれでわかります。

また副葬品が数多く出土しています。金属製品は盗掘によって持ち出されたのか、それほど多くはありませんでしたが、8個の須恵器がほぼ完形で出土しました（写真 土器出土状況）。この須恵器の形はTK209型式と言って、6世紀末から7世紀初めの特徴を持ちます。古墳の築造時期をほぼ特定することができました。さらに、玉類が数多く出土したこともこの古墳の特徴と言えましょう。水晶製勾玉・ガラス製管玉・ガラス製小玉が計60点以上出土しています。高知県の中でも最多を誇ります。ガラス小玉は、黄色・青色・緑色とカラフルです。これら以外に、耳環というイヤリングも出土しています。当時のアクセサリーやそれを用いた祭りを復元するのに大いに役立つと考えられます。（高知大学 清家 章）



土器出土状況



玄室奥壁